

1920年代における大西洋を越えた保育学校の受容と展開 —デトロイトにおけるメリル・パーマー保育学校の取組み—

米村佳樹

Transatlantic Acceptance and Development of Nursery Schools in the 1920s:
the Case of The Merrill-Parmar Nursery School in Detroit

Yoshiki YONEMURA

抄 録

本稿の目的は、1920年代において保育学校がどのように受容と展開されたかをデトロイトのメリル・パーマー保育学校を事例にマーガレット・マクミランなどとの国際交流の視点から明らかにすることを目的としている。第一にメリル・パーマー保育学校は、少女を育児について訓練するとともに、就学前児童の一定の訓練の価値を評価する実験所を提供することを目的に設置された。第二にホワイトが英国の現地研究のためにマクミラン保育学校に派遣された。メリル・パーマー保育学校は英国の保育学校方式によって、英国の保育学校の主任であったヘントンを教師にして1922年1月に開設された。第三に子どもたちは、「なすことによって学ぶ」といった進歩主義教育の原理に基づいた教育を受けた。第四に両親教育と両親前教育が多様な専門家たちの助けを得て展開された。第五にウーリーは、保育学校を教育制度に編入させることを納税者に承認してもらうために、保育学校が5歳未満児と若い女性にとって利点があることを証明することに尽力した。

キーワード：メリル・パーマー、保育学校、両親教育、マーガレット・マクミラン、E.D. ホワイト

I. はじめに

アメリカ合衆国では、1990年以降3歳から4歳の就学前児童を対象に州基金によるプレ幼稚園 (Pre-kindergarten) が徐々に発達してきたが、州によって質量に大きな格差がある。2022年現在、全米の3歳児の6.4%、4歳児の32%が登録されている。コロンビア特別区、フロリダ州、ヴァーモント州、アイオワ州、オクラホマ州、ウィコンシー州、ウェストヴァージニア州では、普遍的プレ幼稚園の実現を目指して60%以上の4歳児にプレ幼稚園プログラムが提供されている。反対にワシントン、アリゾナ、デラウェア州など9州では4歳児の10%未満しか登録されておらず、アイダホ州やインディアナ州などの6州ではプログラムは皆無であり、州による格差が大きい。また、幼児教育・発達基準、教師の学位 (学士号)、プレ幼稚園教諭養成、最大クラス規模 (20

名以下)、スタッフと子どもの割合 (1名対10名以下)、専門能力開発など10項目の全国的な質基準についても、その充足に格差が見られる。このようにプレ幼稚園は、量の拡充と質の向上などの課題を抱えている。¹⁾

第一次世界大戦以降に発達した保育学校はこうしたプレ幼稚園の前身と言える就学前教育施設であるが、量の拡充とともに、3歳から4歳の幼児に相応しい教育の提供という課題の解決のために尽力してきた。そうした、一世紀前の保育学校の尽力は現在のプレ幼稚園と深く結びついている。それゆえ、プレ幼稚園を理解し、その将来を展望するためにも、保育学校の設立経緯や理念、実際などについて明らかにすることは大きな意義を有する。

アメリカ合衆国における保育学校は、医学や心理学、生物学など分野における科学研究による就学

前期の教育的社会的重要性の認識、少子化や都市化、母親の就労に伴う家庭の教育機能低下、両親教育運動といった社会的背景の下に設置されてきた。特に、英国の影響、すなわちマクミランによる保育学校の設置と1918年の教育法による保育学校の設置奨励に関する教育情報がアメリカ合衆国に紹介されたことが、新しいタイプの保育学校への関心を高揚させる要因になった。²⁾

本稿は、マクミラン保育学校や1918年の教育法などの英国の影響に着目し、国境を越えた国際交流の視点から、ミシガン州デトロイトのメリル・パーマー保育学校を事例に1920年代のアメリカ合衆国における保育学校の受容と展開を解明することを課題としている。メリル・パーマー保育学校のホワイト(Edna Noble White, 1879-1954)は、マクミラン(Margaret McMillan, 1860-1931)やオーエン(Grace Owen, 1873-1965)、リッサ(Lillian de Lissa, 1885-1967)といった英国の保育学校のパイオニアと交流し、彼女らの影響を受けながら、1921年にアメリカ合衆国の社会的教育的ニーズに適合させた保育学校の設立と運営に着手した。

デトロイトのメリル・パーマー保育学校に関する先行研究を見ると、我が国では戦前に上村哲弥がメリル・パーマー保育学校のウーレー校長への直接取材や彼女の論稿から得た保育学校の子どもたちの成長の様子や教育的利点などを紹介している。³⁾最近では、「1920年代のアメリカ合衆国における保育学校運動の展開—全国保育学校委員会の設置とその活動」『幼児教育史研究』(幼児教育史学会、第12号、2017年)「1920年代における大西洋を越えた保育学校の受容と展開—コロンビア大学ティチャーカレッジにおけるP.S. ヒル主導による取組み」『幼児教育史研究』(幼児教育史学会、第18号、2023年)及び「第一次世界大戦後のアメリカ合衆国における保育学校の発達—その理念と実態—」(註2参照)といった拙稿があるが、本稿で取り上げるメリル・パーマー保育学校は検討されていない。

アメリカ合衆国では、フォーレスト(Ilse Forest)は、その著作の中で、メリル・パーマー保育学校に言及し、保育学校と家庭との関係について詳述して

いる。⁴⁾またベイティ(Barbara Beaty)は、メリル・パーマー保育学校について、ホワイトの経歴やマクミラン保育学校での実地研究、保育学校の設立と運営、両親教育と両親前教育、ウーリーによる児童発達研究を取り上げて分析している。⁵⁾さらに、ラスカラリデスとヒニッツ(V. Cellia, Lascarides and Blythe F. Hinitz)もメリル・パーマー保育学校を取り上げ、ホワイトの経歴やラッチェル・マクミラン保育学校における研修、保育学校の設立経緯や日課、受託児童、職員、両親教育、教師養成などについて明らかにしている。⁶⁾なるほど、これらのアメリカの著作は、メリル・パーマー学校が英国の保育学校の理論と実際によって影響を受けたことを明らかにしているが、具体的にどのような影響を受けたかについて、掘り下げた検討を行っていない。特に英国での現地研究からホワイトが何を学び、どのように保育学校の設立運営に生かしたかについての解明は不十分である。また、メリル・パーマー保育学校のお雇い英国教師であったヘントンが果たした役割などについての具体的な言及はない。

ホワイトヘッド(Kay Whitehead)による研究は国際ネットワークの視点から行われたものである。そこでは、リサとホワイトの交流に言及し、リサが設置したロマニー保育学校を訪問したことや、メリル・パーマー保育学校にロマニー保育学校の教諭、ヘントンとハリーが雇用されたこと、リサの進歩主義教育への傾倒というよりも、家政学というホワイトの背景と両親教育への彼女の関心を反映していたことを明らかにしている。ただし、オーストラリアやカナダとの人的な国際交流に重点が置かれ、ホワイトとの交流については概略的であり、十分な検討はなされていない。⁷⁾

以上のような先行研究を踏まえ、本稿では、アメリカ合衆国における保育学校のパイオニアであったデトロイトにおけるメリル・パーマー保育学校を事例にして、1920年代におけるアメリカ合衆国の保育学校の受容と展開について大西洋を越えた国際交流の視点から、Childhood Education, The Elementary School Journal, The Survey, Mother and Child, Progressive Education, The Public Health Nurse, Child Study,

Detroit Educational Bulletin, The New Era等の資料を用いて解明することを目的としている。具体的には、第一にアメリカ合衆国における保育学校運動の指導者であったホワイトが英国のマクミランやオーエン、あるいはリサとの人的交流を通して何を学び、それをどのように保育学校の設立運営に生かしたか、第二にヘントンやハーレイ (Winifred Harley) などのお雇い英国教師はどのような動機でアメリカ合衆国に来て、どのように英米の保育学校の違いを感じたか、第三に保育学校および両親教育・両親前教育の実際はどのようなものであったか、第四に保育学校の公立化に関する関係者の見解や取組みはどのようなものであったか、について明らかにする。

II. メリル・パーマー保育学校と英国との国際交流

1. メリル・パーマー保育学校の設立経緯と英国での実地研究

アメリカ合衆国における保育学校運動は、家政学の分野でも展開されたが、そのパイオニアはデトロイトのメリル・パーマー保育学校であった。その設立経緯は以下の通りである。ミシガン州上院議員の裕福な未亡人、メリル・パーマー (Lizzie Merrill Palmer) は、「地域社会の福祉は、神聖にも、それゆえ、不可分に、母性の質、その家庭の精神と性格による」という強い信念をもっていた。この信念の下、彼女は、1916年に少女と若い女性が妻と母親の機能と役割、また家庭の運営や監督を担うのに適合するように精神的、道徳的、身体的、宗教的に教育する学校の創設と維持のために豊富な基金(3百万ドル)を遺した。こうしてメリル・パーマー母性と育児学校 (Merrill-Palmer Motherhood and Home Training School) が創設された。これにより、アメリカ合衆国で初めて、少女と若い女性たちは子どもたちの心身の発達を学ぶことが出来るようになった。その校長として、オハイオ大学家政学部長で、全米家政学協会の会長でもあったホワイトが招聘され、1920年2月5日から活動を開始した。⁸⁾

早速、少女と若い女性を母性へと訓練するという明白な理念の下に教育が実施されたが、ホワイトや理事たちは、その試みは失敗であったことを認めた。

その理由は、そもそも母性は抽象的に教えられない題材であり、誰も実験的方法を考案していなかったからである。⁹⁾ そこで、1921年の春、ホワイトは、理事会にフィッシャーの教育法によるイギリスの保育学校の方針に基づいて、少女と若い女性を母性へと訓練する実験場を提供するとともに、就学前児童に対する一定のタイプの教育の価値を測るために実験的に保育学校を設置するという計画を理事会に提出した。¹⁰⁾ 理事会の承認を得るやいなや、彼女は1921年の夏、イギリスを訪問し、マーガレット・マクミランの下で保育学校の実地研究に着手した。彼女自身、家政学を専攻していたこともあり、子どもの身体的健康に力点を置いたマクミランの実践に深く共感した。¹¹⁾

ホワイトはマクミラン保育学校の実地研究の合間に、ロンドンの貧困地区にあったジェリコ保育学校 (Jellico Nursery School) を見学したり、グレイス・オーエン (Manchester College for Teachersの校長) やリッサ (Gipsy Hill Training Collegeの校長) と会ったりした。特に彼女は、「モンテッソーリ大学」と称されたロンドンのジプシーヒル保育者養成カレッジ附属のロマニー・ロード保育学校を何度も訪問し、リッサとの生涯にわたる交友を始めた。¹²⁾ ホワイトは、英国における保育学校の現地研究により、このタイプの学校は幼い子どもたちにとって極めて重要な価値があるし、若い女性の訓練にも利用できることを確信を得た。と同時に、彼女は、子どもの健康と身体的ケアに重点を置いていた英国の保育学校よりも一歩進めて、精神的発達を視野に入れた「全き子ども」"Whole Child" の育成に取り組むことにした。¹³⁾ ホワイトの「全き子ども」への信念は、保育学校に心理学者 (Helen Thompson Woolley) や栄養学者 (Lila Skinner)、家政学者 (Ellen Miller) など、多分野の専門家を呼び集めたことに表れた。¹⁴⁾

帰国後、ホワイトは、保育学校の校長補佐として就任予定のシンシナティ公立学校職業指導局長であった心理学者のウーリー (1874-1947) と一緒に1921年秋から開設準備を始めた。ウーリーが保育学校の実験を担当した。校舎として10月に芸術品収集家で有名であった故フリーア (Charles M. Freer) の

邸宅が購入された。3つの大きなギャラリーは、保育学校の目的に適合していた。リッサの取り計らいもあって、前述のロマニー・ロード保育学校 (Romany Road Nursery School) の教師、ヘントン (Emma Henton) が主任教師として英国から迎えられた。ヘントンはグレイス・オーエンの指導の下にあったマンチェスターのメイザー養成カレッジで訓練を受けていた。イングランドのリーズ養成カレッジ (Leeds Training College) 出身のエヴァンス (Grace Evans) がヘントンを助けた。こうした周到な準備を経て、少女と若い女性を母性へと訓練する実験学校としてメルル・パーマー保育学校 (登録数 23 名) が 1922 年 1 月 9 日に開設された。一年後には、学生の寮と増えたスタッフ用に隣の家が確保されるとともに、ロマニー・ロード保育学校のハーレイが助手として加わった。これらのお雇い英国教師たちが、英国で培った最高の知識と経験を生かしながら、メルル・パーマー保育学校の教育を担った。¹⁵⁾

2. メルル・パーマー保育学校の設置目的

メルル・パーマー保育学校は、以上のような経緯を経て、小規模な実験学校として設置された。その目的は、少女と女性を母親と妻の職務へと訓練するための実験室を提供するという当初のものに加えて、3歳、4歳の子どもたちが通う保育学校は、1917年にイングランドで採択された教育令をミシガン州でも制定することを正当化するほど十分な利点があるかどうかを科学的に実証することであった。¹⁶⁾ こうしてメルル・パーマー保育学校は、幼児を教育する場であるとともに、学生たちのための訓練・観察センター、就学前児童の成長と発達を研究のための実験所となった。¹⁷⁾

保育学校の開設から1年後に、デトロイト公立学校の少女・女性活動 (Girl's and Women's Activities, Detroit Public Schools) のスーパーバイザーであったクリーブランド (Elizabeth Cleveland) は、その実験成果を次のように報告している。第一の少女を保育に関して効果的に訓練する手段としての保育学校について、6カ月の経験から女性にとっての利点は明らかであり、訓練を受けた女性たちや、彼女らの

教師も、より効果的な母性へ自分たちを適合させるのに必要な理解を獲得してきたことに合意している。正しい食事と規則正しい習慣の矯正効果を観察してきた少女たちは誰一人、我が子をこれらの点において放任することはないだろうと確信された。第二の公教育をより早く始める必要性を公的に承認する手段としての保育学校については、わずか6カ月の経験からでは子どもたちへの利点は明確にならないことなので、希望を語っただけである。「いずれ子どもたちへの利点の大きさが、この実験の成果によって示されるならば、我々は、画期的な革新のための計画を開始しなければならない。つまり、我々の公立学校制度に少なくとも3歳、4歳児を含めるように拡充することである。そうした拡充は2重の価値をもつだろう。一つは年長の少女に彼女らが必要とする訓練を与える価値であり、もう一つはすべての子どもたちにより早い組織された教育を与える価値である」。¹⁸⁾

3. ホワイトとヘントンによる英米の保育学校観

マクミラン野外保育学校で実地研究を行うなど、英国の保育学校を身近に体験したホワイトは、英米の保育学校運動の目的と対象、プログラムの違いについて、1927年12月27日にワシントンで開催されたアメリカ社会学会の席上、次のように語った。

「英国の保育学校運動は、明らかに就学前期に発達した健康上の欠陥をもって小学校に入学してくる多くの子どもたちによって毎年提示される問題を解決しようとして、主として社会的視角から発達した。それゆえ、英国の保育学校はたいていスラム地区に位置し、貧困な者のための施設と見られている。

アメリカ合衆国の保育学校運動は、全く異なる方向から発達してきた。大抵、第一の目的は、子どもに最善の発達機会を与える環境を提供することとともに、両親が彼らの子どもたちを理解し、指導するのを助ける施設を発達させることであった。その結果、アメリカ合衆国の保育学校の子どもは、恵まれない家庭よりも、専門職の、中産階層の家庭を示している。保育学校プログラムは、イングランドよりも、ずっと科学的な方針によって発達してきた」。¹⁹⁾

いわゆるお雇い英国教師、ヘントンは、英国で得た経験とアイデアをアメリカ合衆国での最初の保育学校に生かすとともに、アメリカ合衆国の文化社会に適合させる役割を担うことになった。彼女のような英国の保育学校教師がなぜ、ここ3年の間に米国の保育学校教師となったのか。ヘントンは、その原因として、米国ではこれまで就学前児童分野の教員を養成する計画を実施する明確な努力がほとんどなされてこなかったことに加えて、英国の保育学校教師にとっての米国の保育学校の魅力を挙げて、次のように説明した。「両国における状況を熟知している者にとって、先見の明と進取の精神をもつ英国の教師がアメリカに向かうのは驚きではない。米国を特徴づける幅広さと有望な見通し、パイオニアに与えられるより大きな激励と自由、基金の豊富な供給によって可能となる全体が、容易に抑えることの出来ない誘因である」²⁰⁾と。その他、1918年の教育令により、保育学校を設置する権限が地方当局に与えられたが、戦後の厳しい財政事情のために英国において保育学校の設置が進展せず、行き詰まっていたことも影響しているかもしれない。

このように米国の保育学校がもつ多様性、自由、豊かな基金などに魅せられたヘントンは、デトロイトのメリル・パーマー保育学校の教師として就任した。彼女は、前述したメリル・パーマー保育学校の設置目的である2つの観点、つまり少女や女性を育児に関して効果的に訓練する両親教育・両親前教育の手段、また公教育をより早く開始することに対するニーズの公的な承認の表現について次のような見解を示した。前者は、スラムに住む貧困な子どもを対象にしていた英国の保育学校には見られない観点である。後者もとても重要な観点であり、アメリカ合衆国では大いに栄養学や教育学、心理学、衛生学、生理学による幼い子ども及びその最善の発達を促す環境に関する科学的な研究を通して、保育学校を公教育として公的に承認させることに力を置いている。この観点も、英国のほとんどの保育学校に欠けるものであると指摘した。²¹⁾

Ⅲ. メリル・パーマー保育学校における教育

1. 保育学校の教育目的

メリル・パーマー保育学校は、家庭に取って代わることでなく、家庭教育を補完することを目的にしていた。ホワイトによれば、都市の平均的な家庭では新鮮な空気や日光、屋外遊戯施設がしばしば不足しているし、幼い子どもたちは個人の空間とプライバシーを持ってない密集した住宅に住んでいる。母親は多忙であり、同年齢の仲間も少ない。このように変貌した社会背景の下、子どもの全面的な発達にとって理想的な教育環境が提供されていない。それゆえ、補完機関である保育学校が必要であり、保育学校は、十分な空間、子どものニーズと能力に配慮した設備と遊具、園庭、訓練を受けた大人の監督の下、子どもたちに安定した、幸せな環境を提供すると。²²⁾

メリル・パーマー学校は、両親を教育する学校でもあった。「乳児と就学前児童の健康問題は、親の協力と理解なしには解決できない。両親の教育は彼らに子どもに関する情報を与えるだけでなく、両親の態度と行動を変えるという、より困難な課題を伴うことを忘れてはならないものである」。²³⁾それゆえ、入学許可は、両親が学校に協力するという誓約を条件にしていた。入学直後に行われる親とスタッフの面談に始まり、子どもを調査する専門家と面談する機会も設けられた。こうした個別面談とは別に、日々の送り迎えは、親が学校とそのやり方を理解する場として期待された。保育学校は、身体的なケアについて家庭の協力を求めた。例えば、毎週、子どもは給食の献立を持ち帰り、家庭は家庭における子どもの食事について報告した。また、学校のスタッフが家庭訪問を行い、両親との親密な関係を築いた。子どもが言葉の矯正や行動上の問題などを抱えていれば、専門家に相談して助言を得るように求めた。²⁴⁾

2. 保育学校の対象と日課

メリル・パーマー保育学校の子どもたちの中には豊かな家庭あるいは貧困な家庭の子どももいたが、たいていは中産階層出身であり、貧困や不利な条件に苦しんでいなかったという。²⁵⁾ 保育学校は、これ

らの中産階層の2歳から5歳までの子どもたちを対象にしていた。幼稚園年齢である5歳児の入所は他の保育学校では見られないものであった。保育時間は午前8時頃から午後3時30分あるいは午後4時までであった。日課は、以下の通りである。

子どもは朝、登校すると、出来るだけ自分でスカーフを脱ぎ、自分の戸棚に掛けた。その後、伝染病の感染予防のために保健局（Board of Health）から派遣された看護師による健康チェックを受けた。風邪や発熱の兆候があれば、帰宅させられた。学校で安全に世話できる軽症の場合は、看護師が安静にさせたり、室外の遊びを禁じたり、食事や運動を調整するなどして対応した。他の子どもたちは保育室に入り、各自が選択した作業に取り組んだ。1時間後、子どもたちは輪になって集り、15分位お話を聞いたり、ゲームをしたり、歌を劇化した。それから午前のおやつ時間、オレンジジュースなどを飲んだ。その後、11時30分頃まで外遊びであり、好きなように砂場で遊んだり、走り廻ったり、登ったり、ゲームなどをした。手や顔を洗って部屋に入り、参加することは強制ではないが、リズムや歌唱といった楽しい音楽レッスンを受けた。それが終わると昼食。昼食の献立は、栄養を担当している専門家によって計画されていた。食事の配膳は自分たちで行った。昼食後、午後3時まで約2時間の昼寝であり、子どもたちは自分用の寝台と毛布を持っていた。昼寝から覚めると、午後のおやつ時間に、通常は牛乳を飲んだ。その後、お迎えまで外遊びをした。²⁶⁾

このように保育学校では家庭と違って日課の中に毎朝の健康チェックに加えて、昼寝と食事時間がはっきりと定められており、規則正しい習慣が形成された。運動、戸外遊び、手洗いと洗顔、歯のケア、トイレ、その他の健康な生活に必要な身体的習慣も教えられた。こうした子どもの身体的健康に対する配慮は、ホワイトがマクミラン保育学校の実践から学んだものであった。²⁷⁾

3. 「全き子ども」の教育と「生活による教育」

保育学校では、前述したように、身体的だけでなく、感情的、認知的な側面を含め、2歳から5歳ま

での「全き子ども」、すなわち子どもを全体的に研究し、その研究成果に基づいて、それぞれの子どもの全面的な発達をもたらす最適な環境の設定に尽力した。²⁸⁾

また、メリル・パーマー保育学校のスタッフであったランド（Winifred Rand）は、保育学校の実際について次のように説明している。保育学校の教育原理は、デューイの教育思想に依拠した「なすことによって学ぶ」、「生活することによって学ぶ」であり、この教育原理に基づいて実践された。保育学校は子どものニーズが優先的に配慮される生活の場であり、子どもたちは、仲間との生活を通して学び、身体的に精神的に社会的に発達する。教師は、子どもたちに賢明で、愛情深いケアを与えて、彼らとの信頼関係を構築し、精神的安定をもたらす。生後18カ月から5歳までの子どもたちが通っていた保育学校では、子どもに本によって知識を注入する場という従来の学校観は通用しなかったと。²⁹⁾

こうしたランドの説明をみると、メリル・パーマー学校の教育は、「生活による教育」を推奨するデューイの進歩主義の影響を受けていたことが分かる。これは、フォレストの指摘と合致する。彼は言う、「子どものために与えられている教育活動は、多くの場合、進歩主義幼稚園の活動に極めて似通っている。モンテッソーリ教具も使われている。室内と室外の遊びのための多様な玩具が提供されている。音楽とリズム活動が、筆者の知る全ての学校のカリキュラムに含まれている」³⁰⁾と。

IV. 両親教育と両親前教育

1. 両親教育と両親前教育の必要性

保育学校校長補佐であったウーリーは、1925年10月に開催された『両親について：現代の親に関するシンポジウム』の席上、「保育学校：新しいニーズへの対応」と題する講演を行った。その中で、親である（Parenthood）ための教育が十分に提供されていない現状において、保育学校はよりよく教育された両親に対する新しいニーズを満たす有効な教育機関になること、また両親だけでなく、未来の親である若い人々にも子どものニーズや能力について今

以上に理解させる教育が必要であることを力説した。³¹⁾

こうした認識の下、メリル・パーマー保育学校は、両親教育と児童発達研究を財政的に支援する財団LSRM (Laura Spelman Rockefeller Memorial) の補助金を獲得して、就学前児童のニーズに対する理解に重点を置いた両親教育と両親前教育に積極的に取り組んだ。³²⁾

2. 両親教育の実際

スタッフとして両親教育を担当したのはランドであった。彼女は、直近までボストンの子ども病院において児童福祉の仕事に従事しており、ボストン乳児衛生協会 (Baby Hygiene Association) の理事長をしていた人物である。³³⁾

彼女は、メリル・パーマー保育学校における両親教育の実際について次のように報告している。両親教育は、子どもへの共通の関心を接点に親の会や集団討論、個人面談、観察などの方法で行われた。親の会では、父親と母親はよりよい親になることへの共通の興味をもって、一緒に子育ての話聞いた。両親が新しい子育ての考えを受け入れた結果、子どもは両親の別々のやり方を経験することによって生じる精神的な混乱から救われた。集団討論には日中母親のみが参加するもの、夕方に父母が参加するものがあった。個人面談も教育的に利用され、親がスタッフの客観的な目を通して我が子を見る手助けになった。さらに保育学校における午前中の観察参加は、母親だけでなく父親も求められた。昼食時間、親は3名から4名の子どもが利用する一つのテーブルを担当した。日頃、家庭で我が子に指示しがちな父親は、22名の子どもたちがほとんど直接的な命令を受けず自由に楽しそうに遊んでいた、自分たちだけで物事を解決したりしている様子などを観察し、通常は「放っておく」教師が、踏み入れる時には理由があることを理解した。その結果、家庭において「ジミー、これしなさい、あれしなさい」「ジミー、だめよ」という命令や禁止の言葉も少なくなったという。³⁴⁾

3. 両親前教育の実際

親になっていない若者たちに幼児の保育について語ることは困難を伴ったが、保育学校は抽象的になりがちな保育に関する教授を活性化するために利用できる実験室であった。³⁵⁾ ウーリーによれば、「保育される子どもたちがいないのに、子どもの保育について教えることは、実験室なしに物理学や生物学を教えること以上に教育プロジェクトとして絶望的なことであった」。³⁶⁾ それゆえ、メリル・パーマー学校は、その保育学校を活用しながら若い女性に幼い子どものニーズと能力に関する知識や対応する態度について学ぶ両親前教育 (Preparental Education) を実践した。

両親前教育は、当初はミシガン農業大学だけであったが、次第に全国の大学から子どもたちの発達と教育を学ぶために来校してきた学部生と院生も受講した。1924年-25年度には、90名の大学4年生と20名の大学院生が提供された多様なコースあるいは研究活動に登録されていた。学生は18カ所の大学から来ており、8名は保育学校教師養成コース (1年制) をとっていた。³⁷⁾ 保育学校での活動は協定によって自分の大学における単位として認められた。

学生たちは、3カ月から4カ月の期間、幼い子どもたちの発達のあらゆる側面を学ぶとともに、実験所としての保育学校では2名の子どもを担当しながら子どもたちの発達とその対応について興味をもって学んだ。

ウーリーは、「これらの学生が彼女らの特別な子どもたちに対して母親らしい態度を急速に取り始めるのを見るのは興味深い」と述べ、母性を育む実習効果を強調した。³⁸⁾ 彼女らは、将来、母親として、あるいはソーシャルワーカーや教師、看護師として子どもの問題に直面した時に役立つ科学的知識と観点をもつことが期待された。院生は、小児保健や児童心理学の上級コース、あるいは研究者や保育学校教師として養成されていた。³⁹⁾

以上、メリル・パーマー保育学校は、主として中産階層の子どもたちが通っていたこと、ホワイトの家政学の背景と両親教育への興味を反映していた点で、ヘントンとハーレイがいた英国のロマニー・ロー

ド保育学校とは異なっていた。ホワイトの指導の下、メリル・パーマー保育学校は、科学的方法に基づく熟練した指導のために、保育学校と両親教育に興味ある者にとってメッカになった。⁴⁰⁾

Ⅳ. 保育学校の公教育化への取組み

1. 従前の就学前教育・保育施設の批判的考察

なぜ、就学前の教育に保育学校、その保育学校の公教育化が望ましいのか。この問いに前述したクリーブランドが答える。彼女は、就学前児童に対する教育を組織的に取り組んできた施設として、ドイツの幼稚園、イギリスの幼児学校、フランスの母親学校、モンテッソーリ学校、保育所を取り上げ、それぞれの弱点を指摘した。

まず、幼児学校を取上げた。子どもたちの能力を最善に発達させる訓練の種類を決定するためには子どもたちを研究する必要があるが、幼児学校はその必要性を全く理解せず、子どもの性質に衝撃的な害を加える抑制を強いた。無償幼稚園は、こうした不自然な抑制に反発し、遊び活動による教育という原理を受け入れたが、余りに数多くの集団作業によって子どもを束縛するとともに、科学的というよりもむしろ情緒的な態度を奨励した。母親学校は、アメリカの見解からすると、子どもたちに余りに支配的な統制を行っているように思える。モンテッソーリ学校は、余りに狭量で形式的なタイプの感覚訓練を提供し、経験の想像的審美的背景を無視している。最後に保育所は、福祉の観点から問題全体に取り組んでいるが、その興味の中心は子どもたちの教育よりも家庭事情の好転、貧困の改善、犯罪の減少であると。⁴¹⁾

これらの従前の就学前教育・保育施設の弱点を指摘してから、クリーブランドは、保育学校の公教育化こそ、教育的観点から、またニーズを満たすのに十分な規模で問題に対応できると力説した。だが、アメリカ合衆国の国民は、保育学校の設置を可能にした1918年の教育令を制定させた英国のように、それらの好機に覚醒していなかった。そこで、彼女は、メリル・パーマー保育学校は私的機関であるが、その活動によって国民の意識を大いに刺激したいと抱負

を述べた。⁴²⁾

2. 保育学校の公教育化に関するウーリーの見解

前述したように、メリル・パーマー保育学校設置の目的の一つは、英国のように保育学校に対する公的責任をミシガン州において承認することの正当性を科学的に実証することであった。従来、アメリカ合衆国では教育に対する公的責任は、州によって異なるが5歳あるいは6歳から承認された。ウーリーによれば、その合理的な理由として考えられたのは、5、6歳は一人の教師によって大きな集団の下でも有利に運営できる最低年齢であることに加えて、平均的な子どもにとって3Rs、つまり読み書き算数を有利に教えることができる最低年齢であり、これらの3Rsを教えることが公教育の主な目的とされてきたことであった。彼女は、こうした公教育観に異議を唱えた。そして、幼児教育の専門家の下で一日のある部分過ごすことは2歳から4歳の子どもと親の双方にとって利点があること、また保育学校が母親の未来の世代であるすべての女性に貴重な訓練を提供する場として利用されることが望ましく、かつ実行可能でことが科学的に立証できるならば、保育学校を公教育制度の一部として承認することは不合理なことではないと主張した。⁴³⁾

幼い子どもの発達に関する科学的知識が不十分な情勢の下、メリル・パーマー保育学校は教育のためだけでなく、その価値を科学的に実証するための研究施設であった。⁴⁴⁾ 公教育制度の中への保育学校的位置づけは公費の増加をもたらすため納税者を納得させる必要があるが、ウーリーはそれ自体大きな教育運動であるとし、その困難さを認識していた。彼女は、ローバート・オーエンが幼児教育の重要性を述べ、最初の保育学校（幼児学校）を設置したのは100年前であるが、教育制度の中に保育学校を取り入れるにはさらに100年を要するかもしれないと不安を吐露した。他方で、彼女は、保育学校は5歳未満児たちに人生において公平なスタートを与える経費であり、豊かなアメリカ合衆国にはその経費を支払う余裕があると主張した。⁴⁵⁾

ウーリーは、公的責任は5歳未満児の教育にも適

用され、保育学校を正式に教育制度の一部にして、すべての子どもが通えるようにすべきであるという信念をもっていた。こうした彼女の信念は、科学的に立証されたわけではないが、次の6つの観点に基づいていた。第一に2歳から5歳の子どもの教育するには母性愛、母性本能だけでは不十分であり、科学的な訓練を受けていない母親は十分に幼い子どもを教育できない。第二に平均的な家庭、特に都会のアパートには幼い子どもの能力を最善に発達させるのに必要な教育的な環境、設備や空間、多様な用具がない。また材料を購入する資金も選択する知性も欠いている。第三に子どもと実際に関わる場がなければ、母性を育てることは不可能である。第四にすべての女性は、育児において保育の専門家からの援助と協力を必要としている。保育学校は親の責任感を減少させるのではと危惧する必要はなく、むしろ増加させる。第五に子どもを母親と24時間一緒にいることは教育的に最善であるという考えが一般的に受け入れられていたが、現代の科学はこの考えを否定している。母親は、一日のある部分子どもの世話から解放され、自由に自分のプロジェクトを行うことにより、よりよい母親になる。第六に3歳、4歳の幼い子どもにとっても、同年齢の子どもたちと一緒にいることは利益がある。他の子どもの権利とニーズを認めるなど、精神的社会的な発達にとって必要な刺激を受ける。⁴⁶⁾

V. おわりに

以上、1920年代のアメリカ合衆国における保育学校の受容と展開についてデトロイトのメリル・パーマー保育学校を事例に英国との国際交流の視点から究明してきた。この結果、メリル・パーマー保育学校は、英国から保育学校のアイデアを受容しながら、独自の展開を図ったことが明らかになった。

第一に、メリル・パーマー保育学校は、パーマーの遺志に基づいて若い女性をよき親、よき妻にするために訓練することに加えて、3、4歳にとっての教育的利点を科学的に研究して英国の教育法のように保育学校に対する公的責任を承認することの正当性を実証することを目的にして設置された。開設に

先立ち、ホワイトが、英国の現地研究のためにマクミラン保育学校に派遣された。彼女は、研究の合間にロンドンの貧困地区にあったジェリコ保育学校を訪問したり、グレイス・オーエンやリリアン・リサと会ったりして見聞を広めた。

第二にホワイトはジブシーヒル教員養成カレッジの校長、リサとの交流を深め、メリル・パーマー保育学校が開設される時、リサの紹介により来米したヘントンやハーレイらに保育を担当してもらった。これらのお雇い英国教師は、アメリカ合衆国のもつ多様性と将来性、豊かさ、自由に魅了されて赴任してきた。彼女らは、英国で習得した保育学校に関する知識と技術、特に日光、清潔、運動、栄養、睡眠といった子どもの健康へ配慮した保育を行った。

第三にメリル・パーマー保育学校は、英国の保育学校と同様に身体的習慣の形成に重点を置くとともに、ホワイトの主導により、身体的だけでなく、感情的、認知的な側面を含めた「全き子ども」について科学的に研究し、それぞれの子どもの全面的な発達をもたらす最善な環境の設定に尽力した。また、子どもの全面的な発達を支援するためにスタッフとして多様な専門家を活用した。さらに、アメリカ合衆国の幼稚園で実践されていたデューイの進歩主義教育思想に依拠した「なすことによって学ぶ」、「生活することによって学ぶ」といった教育原理に基づいた保育を実践した。

第四にメリル・パーマー保育学校は、財団LSRMの補助金を獲得して、就学前児童のニーズに対する理解に重点を置いた両親教育と両親前教育に積極的に取り組んだ。両親教育は、親の会や集団討論、個人面談、保育観察などの方法で行われた。注目されるのは、母親だけでなく、父親の参加が求められたことである。両親前教育は全国の大学から参加した女学生を対象に実践された。これは、英国の保育学校には見られないユニークなものであった。彼女らは、3カ月から4カ月の期間に幼い子どもの発達のあらゆる側面を扱った両親前教育コースをとり、保育学校では実際に2名の子どもを担当し、生き生きと興味をもって保育について学んだ。

第五に校長のウーリーは、公的責任は5歳未満児

の教育にも適用され、保育学校を教育制度の一部にして、すべての子どもが通えるようにすべきであるという信念をもっていた。こうした保育学校の公教育化を納税者に納得させるために、保育学校が5歳未満児とその親にとって利点があること、同時に未来の母親である若い女性を訓練する場として利用することが望ましく、かつ可能であることを科学的に証明することに尽力した。

第六にアメリカ合衆国と英国の保育学校を経験したホワイトやヘントンによって次のような大きな違いがあることが浮き彫りになった。アメリカ合衆国では子どもに最善の発達機会を提供するとともに、両親教育を行うことを主な目的としており、その対象も貧困家庭よりも専門職、中産階層の家庭の子どもであった。他方、英国では、保育学校はスラム地区に住む子どもたちを劣悪な環境から保護し、その心身を救済するという社会的観点から設置され、その主な対象は貧困な家庭の子どもでもあった。また、アメリカの多くの保育学校は大学構内に設置していたこともあり、幼児の心身の発達と教育に関する研究センター、実験室としての機能を有し、保育学校の施設や設備、プログラムなどを多様な専門分野における科学的な研究成果に基づいて吟味し提供した。

註

1. *The State of Preschool 2022: State Preschool Yearbook*, The National Institute for Early Education Research, 2023, p.11, pp.15-16.
https://nieer.org/wp-content/uploads/2023/09/YB2022_FullReport.pdf
(情報取得2024年1月7日)
2. 保育学校運動の社会的背景については拙稿「第一次世界大戦後のアメリカ合衆国における保育学校の発達－その理念と実態－」『四国大学生活科学研究所年報』（第13号、2020年）に詳しい。
3. 上村哲弥「家庭とナースリー・スクール」「両親の再教育と児童研究」日本両親再教育協会編『子供研究講座』（第6巻、先進社、昭和4年）
4. Ilse Forest, *Preschool Education: A Historical and Critical Study*, The McMillan Company, 1927.
5. Barbara Beaty, *Preschool Education in America: The Culture of Young Children from the Colonial Era to the Present*, Yale University Press, 1995.
6. V. Cellia, Lascarides and Blythe F. Hinitz, *History of Early Childhood Education*, Palmer Press, 2000.
7. Kay Whitehead, 'Women Educators and Transnational Networking in the Twentieth-Century Nursery School Movement', *Women's History Review*, Vol.23, No. 6, 2014, pp.957-975.
8. Anonymous, "The Merrill-Palmer School of Home-Making", *The Elementary School Journal*, Vol.23, No.1, September, 1922, p.9. Elizabeth Cleveland, *Training the Toddler*, J. B. Lippincott, 1922, pp.14-15.
9. Helen T. Woolley, "Preschool and Parental Education at the Merrill-palmer school", *Progressive Education*, Vol.2, No.1, 1925, p.34.
10. Cleveland, *op. cit.*, pp.16-17.
11. Beaty, *op. cit.*, p.152.
12. Whitehead, *op. cit.*, p.960.
13. Anonymous, "The Merrill-Palmer School of Home-Making", *op. cit.*, p.10. Edna Ranck, "White, Edna Noble", *Early Childhood Education An International Encyclopedia*, Vol.3, Praeger, p.842.
14. Ranck, *op. cit.*
15. Cleveland, *op. cit.*, p. VII, pp.16-19. Anonymous, "The Merrill-Palmer Nursery School", *Detroit Educational Bulletin*, Vol.5, No.6, February, 1921, p.18.
<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=uc1.b2986401&seq=462&q1=nursery+school>
(情報取得2024年1月3日)
- Whitehead, *op. cit.*, p.960. "Merrill-Palmer School of Homemaking of Detroit", *op. cit.*
16. Cleveland, *op. cit.*, p.18.
17. Winifred Rand, *The Merrill-Palmer School : Containing Information for Parents of Children Admitted to the Nursery School*, The Merrill-Palmer School, 1939, p.5.

- <https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=mdp.39015071498326&seq=3>
(情報取得2024年1月3日)
18. Elizabeth Cleveland, "Twixt Infancy and Alphabet: An Educational Experiment", *The Survey*, Vol. XLIX, No.7, January 1, 1923, pp.467-468.
 19. Edna Noble White, "The Objectives of the American Nursery School", *The Family*, April, 1928, p.50.
 20. Emma Henton, "The Nursery School Movement in England and America", *Childhood Education*, Vol.1, Issue 9, 1925, p.416.
 21. *Ibid.*, pp.416-417.
 22. White, "The Objectives of the American Nursery School", *op. cit.*, p.51.
 23. Edna Noble White, "Preschool Health Problems", *Childhood Education*, Vol.4, Issue 6, 1928, p.279.
 24. Edna Noble White, "The Nursery School: A Teacher of Parents", *Child Study*, Vol.4, October, 1926, pp.8-9.
 25. White, "Preschool Health Problems", *op. cit.*, p.279.
 26. Cleveland, "Twixt Infancy and Alphabet: An Educational Experiment", *op. cit.*, pp.466-467. Ethel Puffer Howes, "The Nursery School", *Woman's Home Companion*, Vol.L, No.12, December, 1923, p.34.
<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=umn.319510028031159&seq=720&q1=nursery+school>
(情報取得2024年1月3日)
 27. Beaty, *op. cit.*, p.152. Cleveland, *Training the Toddler*, *op. cit.*, pp.21-25.
 28. Cleveland "Twixt Infancy and Alphabet: An Educational Experiment", *op. cit.*, p.466.
 29. Winifred Rand, "The Nursery School-A Learning-Living Place", *The Public Health Nurse*, Vol.22, June, 1930, pp.305-306. Guy Montrose Whipple (ed) *The Twenty-Eight Yearbook of The National Society for the Study of Education*, Public School Publishing Company, 1929, p.194.
 30. Forest, *op. cit.*, p.301.
 31. Helen T. Woolley, "The Nursery School: a Response to New Needs", in: *Concerning Parents: A Symposium on Present Day Parenthood*, New Republic, 1926, p.67.
 32. Whitehead, *op. cit.*, p.961. Edna White, "Health Education of Very Young Children", *The Public Health Nurse*, Vol.15, No.10, October, 1923, p. 530.
 33. Anonymous, "Merrill-Palmer School", *Journal of Home Economics*, Vol.17, No.1, January, 1925, p.53. White, "Health Education of Very Young Children", *op. cit.*
 34. White House Conference on Child Health and Protection, Committee on the Infant and Preschool Child, *Parent Education. Types·Content·Method*, 1932, pp.275-277.
<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=wu.89042006817&seq=11>
(情報取得2024年1月3日)
 35. Woolley, *op. cit.*, pp.67-68.
 36. Helen T. Woolley, "The School and the Pre-School Child", *Mother and Child*, Vol.IV, No.7, July, 1923, p.301.
<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=ucl.10060339694&seq=356>
(情報取得2024年1月3日)
 37. Forest, *op. cit.*, p.302.
 38. Woolley, "The Nursery School: A Response to New Needs", *op. cit.*, p.68.
 39. *Ibid.*, pp.67-68.
 40. W. Bertram Ireland, *The little Child in Our Great Cities*, The American Child Health Association, 1925, p.29.
 41. Cleveland "Twixt Infancy and Alphabet: An Educational Experiment", *op. cit.*, p.447.
 42. *Ibid.*, p.466.
 43. Helen T. Woolley, "Pre-School Education", *The American School*, Vol.8, June, 1922, p.173.
<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=iau.31858034352124&seq=171>
(情報取得2024年1月3日)
 44. Woolley, "Pre-school and Parent Education at the

Merrill-Palmer School” , *op. cit.*, .27

45. Helen T. Woolley, “The School and Children under Five Years”, *Proceedings of the National Conference of Social Work, at the Fiftieth Anniversary Session held in Washington, D.C. May 16-23, 1923*.p.464.
Helen T. Woolley, “The School and the Pre-School Child”, *Mother and Child*, Vol.IV, No.8, August, 1923, p.357.

<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=mdp.39015013787984&seq=1101&q1=woolley>
(情報取得2024年 1月14日)

46. Helen T. Woolley, “The Pre-kindergarten Child,” *The Detroit Journal of Education*, Vol.3, June 1923, No.10, p.464. Woolley, “Pre-School Education”, *op. cit.*, pp.173-176. Helen T. Woolley, “The Real Function of the Nursery School”, *Child Study*, Vol.3, February, 1926, pp.5 -11.

謝辞

本研究内容は、四国大学附属学際融合研究所での研究活動として得られたものである。ここに深くお礼申し上げます。

ABSTRACT

This paper's aim is to clarify how nursery schools were accepted and developed in the case of the Merrill-Parmer Nursery School in Detroit, from the perspective of international exchange with Margaret McMillan in the 1920s.

First, The Merrill-palmer nursery school was established with the aim to provide a laboratory for the training of girls in childcare, and measure the value of certain types of training for children of preschool age. Second, Edna White was sent to England to make a first-hand study of the nursery school with Margaret McMillan. The Merrill -Palmer Nursery School, on the lines of the nursery school in England, opened with Emma Henton, head of an English nursery school as a teacher in January 1922. Third, children received nursery education on the principle of progressive education, "learning by doing". Forth, parental education and preparental education were developed with the aid of many types of specialists. Fifth, White made efforts to demonstrate nursery school's benefit for as young women as well preschool children so that rate-payers would recognize the need for incorporating the nursery school into the educational system.

KEYWORDS: Merrill-Parmer, Nursery School, Parental Education, Margaret McMillan, Edna Noble White